

# 鹿大ジャーナル

## 鹿大広報

鹿児島大学が発信する最先端情報マガジン

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

## 南九州及び南西諸島地域の 「地域活性化の中核的拠点」として

08 ..... 潜入ルポ ～学びの部屋～

### 身近な現象を 科学の目で見てみよう

大学院理工学研究科(理学系) 秦 浩起 准教授

10 ..... 先輩からのメッセージ

OG: 「ハンター民宿BA-BAR」経営/  
NPO法人学生人材バンク

(株)おむすび鳥取勤務 梅野 知子さん

OG: 水産学部附属練習船かごしま丸

三等航海士・事務長 知辺 佳奈子さん

12 ..... 研究室からSCHOLAR INTERVIEW

### うがい液を用いた 口腔がん検診法の確立

鹿児島大学病院口腔外科 濱田 倫史 助教

### 火山から生まれた

### シラスコンクリートの可能性

大学院理工学研究科(工学系) 武若 耕司 教授

16 ..... 鹿大トピックス

### 大野地区公民館長から 感謝状が贈呈されました

ほか

19 ..... 進め! 鹿大生

### 何かしたいという気持ちを 行動に表すことができる場が フードバンクです

水産学部水産学科3年生 田所 貴秀さん

### さつつんが行く!

鹿児島大学保健管理センター



特集

# 南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」として

～奄美群島を舞台とする教育、研究を通じて地域貢献を目指す～

鹿児島大学  
前田 芳實 学長

奄美市  
朝山 毅 市長

司会 本日は鹿児島大学の教育研究および社会貢献活動、とりわけ本学の奄美群島拠点の取り組みと成果について伺いするため、前田芳實学長と朝山毅奄美市長にお越しいただいています。大学と地域の関係や地域が大学に期待することなど、忌憚のないお話を伺えればと考えています。

まず本学の将来像について、第3期中期目標・中期計画との関連を踏まえて前田学長から説明をいただけますか？

## 鹿児島大学の将来像

前田 鹿児島大学は、平成28年度から平成33年度までの第3期に、地域貢献型の大学として機能を強化して、南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」としての大学を目指します。

具体的には、グローバルな視点を有

する地域人材育成の強化、大学の強みと特色を活かした学術研究の推進、また、地域ニーズに応じた社会人教育や地域連携の推進、さらに、機能強化に向けた教育研究組織体制の整備などを挙げています。

とりわけ鹿児島は、南北600kmの広い海域・地域を有しますので、この南北600kmを鹿児島大学のキャンパスとして位置付け、教育・研究ならびに地域貢献を展開していきたいと思えます。

司会 朝山市長から奄美市や奄美大島、奄美群島全体の状況についてお話しただければと思います。

## 奄美群島の状況

朝山 奄美群島は昭和28（1953）年12月25日に日本に復帰しました。その翌年、議員立法で奄美群島復興特別



措置法ができ、現在の奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）に至るまでおよそ60年を経過しています。

一昨年、改正奄振法が制定されましたが、この中で奄美群島12市町村が一丸となって奄美の経済、文化、自然、産業をしっかりと整えていこうという奄美群島成長戦略ビジョンを策定しました。

奄美群島有人8島、大きくは5島の人々が、特に奄美の今後について目標とすること、期待すること、そしてどうしても達成したいことを考えると、やはり奄美が経済的に自立していくためには航空運賃、航路運賃、そして農産物等を内地や都会に輸送する輸送コストを改善していかないことには、奄美群島の自立的経済発展にはつながっていかない、また時間がかかるということ、奄美群島成長戦略ビジョンを策定したわけです。

これにより、LCC（格安航空会社）が就航し、また定期便も格安割引が導入され、運賃低減化が実現しました。

こうした状況において奄美が自立していくための今後の方策としては、現行奄振法を有効に活用しながら、より多くの人々にご来島いただくこと、そ

して同時に、一昨年制定されたまち・ひと・しごと創生法を重層的に捉えながら奄美の持つ優位性を広く国内外にPRしていくことです。

それは、とりもなおさず先人が作り、残してくださった自然、自然の中から生まれた生活、生活の中から生まれてきた八月踊りや島唄などの特異な文化、芸能。これをしっかりと奄美の有効な資産、資源として活用し、経済活性化の一助にすることです。また実際、そういう形で今、奄美は躍動しつつあると、一面自負しているところです。

### 地域課題への取り組み

前田 今、奄美群島の発展に対する非常に熱い思いをお聞かせいただきまして、鹿児島県の素晴らしい宝が眠っているこの島々を、鹿児島大学としても、大いに発展させる方向で、全学を挙げて協力していければと思っております。

鹿児島大学は、文部科学省の平成26年度「地（知）の拠点整備事業」いわゆるCOC事業に採択され、かごしまCOCセンターを設置しました。

鹿児島県特有の地域課題について、地域防災・医療・観光・国際事業、エネルギー、農林畜産、水産といった部会を作り、自治体や産業界からの相談に対応できる体制をとっています。

また教育面では地域マインドを備えた人材養成のプログラムも準備しており、その中には、奄美地域の発展に向けての教育プログラムも大学として整えつつあるところです。そういう意味で、地域貢献マインドを持った学生をぜひ奄美にも送り込みたいと思っています。

それから大学による地域創生推進事業、これはCOC+（プラス）という事業ですが、これについても鹿児島大学は採択されています。学生のインターシップ、就職支援策の拡充、それから地元就職の促進などをこの中で進めたいと思っています。インターシップや就職支援という面でも、奄美群島を視野に入れた学生の支援に力を注いでいきたいと思っています。

### 地域と大学の関わり

朝山 われわれは今日に至るまで、島嶼という環境においては人的資産の蓄えが最も重要なことと位置付けてきました。鹿児島大学には平成16年に奄美に大学院人文社会科学研究所のサテライト教室を作っていただきました。そ

して私どもが合併する直前の平成18年3月13日には奄美市（当時の名瀬市）と、また合併後の平成26年11月には奄美群島広域事務組合と包括連携協定を結んでいただきました。そして昨年の4月には国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置していただきました。こうした連携を通して、私ども行政はもとより、住民も鹿児島大学を身近に感じています。

人的資産に関連しますが、鹿児島大学からのインターシップの学生さんが、一昨年は二人、昨年は一人、私どもの地域の事業として「知の地域おこし連携事業」に来てくださり、観光、地域の産業、文化、福祉などについて職員と一緒に頑張ってくださいました。

やはり、知的資産、地域を育んでいただいている鹿児島大学の皆さまに、奄美の現状について客観的観点から教えていただきながら、われわれも自覚し自立していかなければならない。そういう意味で連携を深めることは、奄美の人的資産、人材育成にとって大変重要なことであると考えているところです。

司会 一方で大学も奄美群島地域には大変恩恵を受けている部分がありますね。



奄美の高倉（鹿児島大学 郡元キャンパスに再建）

というお願いをしています。

地域おこしについても、お互いに連絡を取りながら、鹿児島大学が持っている知的な力をどう活用し、どういう形で協力を進めるかという連携の話も具体的に進めているところです。特に、鹿児島県は全国でも非常に優れた農林水産物を生産していますので、その第6次産業化をどうしたらいいのか、食品加工技術をどうしたらいいのか、また地域で眠っている伝統的な食材をどういうふう nationally 発信できるかという話も伺っていますので、大学としてもぜひ協力できればと考えています。

**司会** 奄美群島の自治体として何か期待することはありますか？

**朝山** 先程も申し上げましたが、地域に知的資産をお貸しいただきたいということに尽きると思います。奄美群島は有人8島、大きく分けて5つの島から成っていますが、それぞれ言語が

違い、慣習が違い、大きく言えば文化的な要素もそれぞれ違うという状況です。北の大島本島笠利地域と南の与論地域とは慣習、言語、風習は全く違うわけです。奄美の来し方400年は沖縄の世2000年、薩摩の世2000年と言われています。沖縄の文化や慣習も、鹿児島の慣習や文化も取り入れながら、その中においてオンリーワンの

文化、芸能、伝統を形成してきたわけです。多種多様な動植物が育つ山を中心にしながら、それぞれの集落があり、そこに生活が育まれて、そこからそれぞれ異なる文化や言語、風習、慣習が生まれた。そういうものが今日に至り、道路環境、情報などすべての条件がある程度フラットになって遜色のない環境になっている。

ここにおいて今ようやく私どもは来し方を振り返ってみて、先人の素晴らしさを知り、現状を踏まえて将来の進路を考える、いわば岐路という位置にあるのではないかと思います。北海道も奄美も沖縄も遜色なく、リアルタイムの情報が時間的な短縮も含めて実現している時代です。文化や歴史を守りつつ、腰を据えて次の時代に飛躍する基礎を作らなければいけない。そうした時期のような気がしています。

そのためにも、人的資産、人材育成ということが必要になってきます。残念ながら奄美は仕事の場やそれを有効に生かし得る組織、あるいは仕事が少ないという状況にあります。その中で鹿児島大学のOB・OGさんが我が市の職員に40名くらいおられます。頼もしい限りですが、その職員が中核をなし、過去、現在、未来をしっかりと見据えながら、企画、立案の仕事などに取り組んでいるところです。

### 奄美群島拠点の意義と役割

**司会** 本学は地域活性化の中核拠点として奄美群島拠点を新たに整備して、昨年、国際島嶼教育研究センター奄美分室ができました。

**前田** これは、鹿児島大学の奄美群島の教育、研究の拠点として位置付けるということ、昨年4月に開設いたしました。奄美には素晴らしい自然をはじめ、文化の多様性、それから伝統的産業があります。そういうものを土台にしなが、鹿児島大学として、新しい社会の構築に向けた研究、教育の場として奄美拠点を位置付けたいと考えています。これから大学としても人的配置を拡充して、研究テーマも体系的に整えて、市民の皆様とともに奄美群島拠点を育てていけたらと思っております。

**朝山** 奄美分室では、河合先生、高宮先生を中心にして、この2年間で約20のシンポジウムや会合を開いていただきました。奄美の自然遺産や環境問題について、住民の皆さんや子供たちに広く分かりやすく講義してくださっていますので、私自身もありがたく思っています。

\*鹿児島大学国際島嶼教育センター 河合溪教授・高宮広土教授

**前田** そうですね。今、お話がありましたように、この南北600kmの鹿児島県全域は、非常に生物の多様性に富んで、文化、芸能などの面での多様性もありますし、その長い歴史の中で培われた文化を、大学としても大切にしながら教育、研究に力を注ぎたいという思いがあります。

今、学長として、県下全域の43市町村を訪問して、各自自治体の首長さんから直にお話を聞かせていただき、鹿児島大学への期待、とりわけその地域に鹿児島大学としてどういうお手伝いができるのか、というところを伺っています。特に、地域医療の問題、過疎地における教育の問題です。鹿児島大学からは、それぞれの地域で学生の教育の場としてインターンシップをさせていただきたい



前田 鹿児島大学は、総合大学の特色を生かして5つの大きなプロジェクトを進めています。島嶼、生物多様性などを含む環境、食と健康、水、エネルギーです。この5つのプロジェクトは部局の枠を超えた全学的な研究活動で、鹿児島県全体の課題であるとともに、全人类的な課題にもなっています。

奄美群島についてもオール鹿大による総合的な調査・研究体制を強化して、地域との共同研究・共同事業に取り組んでいるところです。研究会やシンポジウムには、国際島嶼教育研究センターの教員をはじめ、法文学部、水産学部、農学部、理工学研究科、総合研究博物館など各学部の教員が参加しています。

今年、その研究成果の一部が『奄美群島の生物多様性』、『鹿児島の島々』それから『鹿児島島の食環境と健康食材』という本にまとめられました。

『奄美群島の生物多様性』は、奄美固有の生物層を扱っており、これからの世界自然遺産登録に向けて研究面からのサポートになるのではないかと期待しています。

また『鹿児島の島々』は奄美群島だけではなく鹿児島島の28の有人離島を中心に幅広くまとめています。このように島を対象とした地域の学術研究の取りまとめは、全国でも非常に珍しい



市民向けの「奄美の生物多様性観察会」の様子

のではないかと思います。

それから『鹿児島の食環境と健康食材』ですが、南北600kmにまたがる鹿児島には、他の地域にない素晴らしい食材があるということを紹介しています。

食の面では、食と健康の研究チームが、鹿児島島の「黒膳」を開発しました。黒豚や黒毛和牛、黒酢、黒糖など、高い機能性を持つ「黒」食材で構成された食材を持って「黒膳」というお弁当、お膳をこしらえる提案をしております。これには奄美の食材も取り入れ

ています。

今後は新鮮で良質な素材に高付加価値をつけて、新しい食産業を展開することが重要になってくるとの考えからです。

朝山 食については奄美の素朴なものが逆に、東京へ行っても珍しいがられています。長命草やアザミにしても、私が子供の頃は浜に行けば蹴散らして、食べもしなかったものです。そういう私どもが知らなかった、知りえなかったことを学術的、専門的に教えていただくことが一つの支援になりますし、宝として顕在化しつつあるのではないかと思います。

### 奄美群島広域事務組合との連携協定

司会 自治体との協力、連携としては、先程お話にもありました奄美群島広域事務組合との包括連携協定が締結されたところですね。

前田 これは鹿児島大学と奄美群島広域事務組合との包括連携協定の下で、鹿児島大学の知的資源を奄美群島の発展と振興に役立てることを目的としています。主な連携項目として、新産業創出、基層産業の振興、人材の育成、地域防災対策などを取

り上げています。

朝山 鹿児島大学の人的資産の育成そして地域貢献など、私どもにとっては大変ありがたいことです。せっかく鹿児島大学とこのような包括連携協定を結んだのですから、それをいかに実のあるものにしていくかが重要なのではないかと思います。

奄美市には県立高校が3校ありますが、毎年400名くらいの生徒のほとんどが進学、あるいは就職していく。帰ってくる方は、生産年齢層の25、6歳くらいから60代の間の60〜70名。最終的に300名くらいが減っている。市の人口も合併して4万9千人だったのが今4万3千人。6千人くらい減ったということなんです。そういう実態が12市町村全てにある。そうした意味で奄美大島5市町村は名瀬を中心として、交通事情、情報の状況、生活環境、仕事の環境をほとんど共有する域圏なのです。

体力の弱いわれわれ自治体が、どの村が、どの町が、と競争ばかりしていたのではない。お互い共通の理念をもって、お互い補完し合いながらやっていくのではないかと、ということで、奄美大島5市町村が奄美大島総合戦略会議を立ち上げ、それについて奄振法を生かしながら、新しい地方創生法案を重層的に捕まえて広域的に事

業を申請したところ、国から多くの事業に理解をいただきました。地域を生かして、と言いながら、ヒト・モノ・カネ、資源が乏しいわれわれです。カネは生めないが人的資産は作っていいかもしれない。ですから、モノという資産、カネという資産はないけど、人的資産は作っていいけるのではないか。そういうことを目指してやっていきたいと思います。

### 少子高齢化、過疎化に向けて 〜発想力と応用力〜

司会 少子高齢化、過疎化は全国的な問題だと思いますが、奄美の状況はいかがでしょう？

朝山 奄美が日本復帰した頃は人口23万と言われていました。現在は12万弱、およそ半減しました。もちろん少子化、高齢化しています。高齢化率は奄美市においては低い方ですが、25%を超えています。4人に1人は65歳以上の年齢構成になっている。他の市町村に行くともっと高い。12市町村の中には40%、50%くらいのところもあると思います。一方、合計特殊出生率では奄美12市町村のほとんどが全国の100傑に入っています。1位が伊仙町の2・81。5、10番目に徳之島町、天城町。この3町は全国で10位に入

っており、さらに瀬戸内町、喜界町、和泊町、奄美市、龍郷町が100位以内に入っております。それでも伊仙町においても人口が減っています。

司会 人材が流出しているんですね。

朝山 そういことだと思いません。やはり人口が自然減しているというメカニズムをいかにするかというところは、仕事づくり、雇用の場づくり、まちづくりというまさに地方創生の原点です。こういう状況を一つの現実として捉えてやっていかなければならない。高齢化していることも事実です。少子化していることも事実です。高齢化することが決して悪いことだとは思いませんが、その中でこれまでになく福祉行政の量も質も高まってきつつありますし、自治体の体力がそこで問われていると思います。待機児童対策、少子化対策、高齢化対策を含め、今後はこれらが行政の大きな課題になっていくと思います。そのためには、仕事の場づくり、雇用の場を作っていくことがそれらを解消する大きな要因になっていくと思います。

前田 そうですね。やはり若い人が地域に残るということは大事なことで、地域にある資源や素材で自ら何かを作り出す、という意識がしっか



前田芳實（まえだ よしざね）鹿児島大学長

昭和44年 3月 鹿児島大学大学院農学研究科修了  
（昭和52年3月 農学博士取得（九州大学）  
鹿児島大学助手農学部  
平成 6年 7月 鹿児島大学教授農学部（～平成21年3月）  
平成21年 4月 国立大学法人鹿児島大学理事（～平成25年3月）  
平成25年 4月 国立大学法人鹿児島大学長（～現在）

り根付いた人がその地域に帰っていくということが大事だと思います。そこに仕事があるから就職するというのではなく、育った場所に昔からある良い資源を元に、何か新しいビジネスを起こす、あるいは新しい地域社会を作る材料にするというようなマインドを持った人を育てることが非常に大切だと思います。

これからの地域創生に向けた大学の人材づくりは、やはりそういう応用力というか、自ら進んで何かを作り出すという姿勢を持った人を地域に送り出すということが大切だと思います。そこに雇用があるから住むというのではなく、小さなことでもいいので、何か自分から雇用を作っていくという人育成することが、これからの大学教育には求められると思います。

朝山 まさにおっしゃる通りで、受動的に、仕事があるから就職するというのではなく、それだけ高邁な知識と経験を持った若い人であれば、新しい企業を起こす、起業へのチャレンジをする、またそのような環境づくりや、そういうアクションを起こせるような地域が求められるのではないかと、ある面では思います。

自然が一つの観光資源となり、より多くの皆さんの雇用の場にもなり、そういう資金循環が起こる。そういう視点で、高度な技術や学問を生かしていただければと思います。役所や農協、漁協などもあります。それほど大きな雇用は生み出せない限られたパイですので、自然環境を生かしてちよっとした発想で何かできないかを考える、そういう人が増え



てほしいと思います。

前田 奄美もこれから高齢化が進みますが、高齢の方を対象にした新しいビジネスも可能なのではないかと思います。宇検村かどこかの若い人だっと思ひますが、地域の高齢者が作った野菜を軽トラックで集めて回って、名瀬の市場に持って行って売ってあげる、そして売った収益を生産者のおじいちゃん、おばあちゃんの郵便口座に振り込む、という仕組みを作っている若者がいました。これは高齢者の喜びにも通じますし、またそういう人を支える若者が育っているということでもあります。高齢化社会の一つの新しいビジネスモデルかもしれません。

朝山 小さな集落で、庭で野菜を作っているおじいちゃん、おばあちゃんがあります。近隣の人はみんな同じ野菜を作っているの売り先がない。そこで、野菜を回収して回る、少量でもいいんです。それを中央市場の職員が買い取る。おじいちゃん、おばあちゃんの生きがいになりますね。

司会 それが、今お二人が言われた応用力、発想力ですね。

前田 その環境、その場に合った具体的なものを使って新しい何か、コ

ミュニティを作り出していくということですね。

朝山 それは本当に大事なことで、奄美はマリンスポーツが盛んになりました。われわれはもともと当然のことと考えていましたが、それを企業化して仕事にしているのは都会から来た人たちです。地元にいるとあまり意識がなくて、触発されて気づいたという面がありました。都会から来た人がむしろマリンスポーツの穴場やポイントをよく知っています。

そういうことを自覚し、認識すれば、トータルしてそれぞれのエリア、地域で新しい仕事を起こし、働く場所の確保、資金の循環、所得の向上、安定・安心な生活環境づくりにつながってくるはずですね。これほど奄美がメディアや多くの人々に注目されることは、いまだかつてなかったことです。で、世界自然遺産登録へ向けてもぜひご協力をお願いしたいと思います。

### 鹿児島大学の学生への期待

司会 最後に、朝山市長から鹿児島大学の学生に対する期待をあらためてお願いします。

朝山 鹿児島大学は旧制七高です。私は大島高校の寮にいましたが、寮歌の

原点は七高の校歌でした。そういう中で誰もが憧れた旧制七高です。そのOB・OGが奄美市役所の核を成して、中心的存在になっています。鹿児島県下の行財政すべてにおいて中核を成す人材を輩出している総合大学として、ぜひとも先人に倣った活躍をしていただき、連続と続く人的資産を維持していただきたいと思ひます。

前田 実は私の青春時代、大学時代のスタートは奄美群島にあるのではないかと今振り返ってみてそう思ひます。というのは、大学1年の夏休み、徳之島の辺土野という集落にサトウキビの栽培の実習で3週間ほど滞在したことがありました。ちょうど今頃の炎天の中でサトウキビを30cmほど切る、そして30cmほど赤土を掘り起こして

100mくらい続く畝を作ったんです。そこで農業とはどういうものかを勉強して、農学部の人としては大変たぬになりました。

やはり現場に出て汗水垂らして働くということは大切なことで、ある意味では一生の宝だったなと思ひます。奄美は私の青春の原点と思ひており、奄美に対しては大変親しみを抱いています。学生たちにはやはり現場をしっかりと体験してもらいたいと思ひます。奄美がそのような体験学習の場を鹿児島大学の学生たちに提供していただけたらと希望しています。

司会 本日はお忙しい中、朝山市長、前田学長、ありがとうございます。

司会 中島大輔 鹿児島大学学長補佐(広報担当)



朝山 毅 (あさやま つよし) 奄美市長

昭和44年 3月 拓殖大学商学部卒業  
平成 6年12月24日 笠利町長 (～平成18年3月19日)  
平成18年 6月 3日 奄美市助役  
平成19年 4月 1日 奄美市副市長 (～平成20年4月30日)  
平成21年12月 1日 奄美市長 (～現在)





# 「遊び心と科学」(共通教育科目)

理工学域理学系  
大学院理工学研究科(理学系) 物理・宇宙専攻

秦浩起 先生

文系の学生を対象に開かれている「遊び心と科学」。公開授業にもなっている講義は『科学Ⅱ肩間にしわを寄せて考え込むこと』ではありませぬ。むしろ、身近な現象を科学の目で見るとは楽しいものです」とシラバスにうたわれていた。むずかしい数式を解くのではなく、身の回りの現象を科学的視野から見ようという質問への誘いに、学習意欲が揺さぶられた。ひとつには、原子力発電所の事故や食品偽装などの事件をきっかけに飛び交う風評や報道を見聞きするにつけ、科学的なものの見方の必要性を感じていたこともある。

## 共鳴が始まる

この日のテーマは「揺れる」。持参した大きな箱から秦先生が取り出したのは、1本の棒に吊るされた長短2本の振り子。先生が棒を持つと、長いものはゆっくり、短いものは速く振れる。小学校の理科の実験を思い出したが「揺れるものは必ずリズムを持ちます。この揺れるリズムを固有振動と言います」と、小学校では習わなかった言葉を教わった。見

ているうちに、いつしか、長い振り子だけが大きく、その次には短い振り子だけが大きく揺れだした。手品みただいが、これは手元で揺らし方を微妙に変化させているためだという。「そのものが元々持っている固有の振動(リズム)に合わせて揺ると大きく揺れる。元々持っているリズムと違うリズムで揺ると、そう大きく揺れない。揺すって揺れるという現象の中にはそういう性質があります。この現象を共鳴、あるいは共振と呼びます」。自分の中に在る思いと重なるものに出会った時に生じる「共鳴」は、感情の揺れるリズムが重なるといふことなのだろうか。：。にわかには科学が身近なものに感じられ、次第に授業に引き込まれていく。

## 身近な現象を観察する

振り子を揺るといふ物理の基礎実験が、この世界とどのように関係しているのか、先生の話が続く。「地震が来た時の建物の揺れです。地震による地面の揺れ方にも固有振動があります。ですから、地面の揺れるリズムと合わないビルディングを作らなくちゃ

いけない」

「揺すって揺らす」実験に続き、講義のテーマは「揺すらず揺れる」という話に。箱の中から先生が取り出したのはワイングラス。先生が濡れた指で縁をこすると、予想以上に大きな音が教室内に響く。学生たちにも紙コップと糸が配られ、コップの底に貼った糸を指でなぞって音を出す実験を行った。「音というのは空気の振動です。グラスもコップも1秒間に数百回振動しているから音が出るのです。ワイングラスと糸つき紙コップは似た機構だそうで、これと似た挙動が地殻でも発生していて、現在、地震との関係性が研究されているという。

実験や映像を通じ、ふだん何気なく見ている身近な現象の中に、地球規模の現象を説明するヒントがあることを再認識させられる。

## 予測不能な


## 結果を予測する

秦先生の専門分野は、カオスを中心とする非線形物理学。一般的には混沌とした無秩序な

状態をカオスと呼ぶが、科学では「簡単な規則から生じるにもかかわらず、非周期的で予測不可能な性質を持つ運動や変動のこと。例えば、気象の変動や水の対流、私たちの神経や脳の活動も規則的変動とカオスが同居しているのだという。「あなたが文章を書いている時も、ふとひらめく時があるでしょう?それがカオスかもしれません」。先生は微笑んだ。カオスに興味を持ったきっかけを尋ねると、「規則から一見乱れた振る舞いが生じることへの驚き。そして、規則と不規則の間にあるものへ関心です。不規則だからわからないではつまらないから」との答えが返ってきた。

後期15回の授業を通じ、さまざまな実験や映像を活用しながら、学生たちには何かを考えてもらいたいと秦先生は話す。それぞれの学生の持つ固有振動が秦先生の振動と共振し、ひらめきが脳内に生じ、新しい発想になる。授業が進むにつれ、そんなカオスが生まれていく予感がする。

profile



秦浩起 (はた・ひろき) 准教授

1985年九州大学理学部卒業、1990年九州大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士)、鹿児島大学理学部講師、現在、学術研究院理工学域理学系物理・宇宙専攻 准教授

[所属学会] 日本物理学会、形の科学会  
[専門分野] 非線形物理学、統計物理学  
[研究テーマ] カオス ○フラクタル  
○非線形科学



「ハンター民宿BA-BAR」経営／NPO法人学生人材バンク・(株)おむすび鳥取勤務

梅野 知子(うめの さとこ)

福岡県出身。2008年3月鹿児島大学農学部生物生産学科卒業。2010年3月九州大学大学院比較社会文化学府日本社会科学専攻修了。同年NPO法人学生人材バンク入社。2011年鳥取市で「ハンター民宿BA-BAR」オープン。

OB OG Interview

01

「動物」を軸にアンテナを張り国内外に足を運んだ学生時代、  
鳥獣害対策を通じて地域に貢献するライフワークに導かれました。

大 学では家畜や野生動物について学びました。その傍ら動物福祉サークル「YELL」の部長として活動し、カナダへの短期留学では動物園でボランティアを務めるなど、動物を軸としていろんなところにアンテナを張っていました。研究のために訪れたザンビアと北海道で、人と動物の関わりについて深く考えさせられる機会があり、動物保護という視点から人と動物のすみ分けというところに関心の軸が移り、狩猟免許を取るに至りました。

鳥獣害対策を通じて地域と関わる面白いことをしたい、という思いをもって就職活動していた時、若者と地域をつなぐ活動をしている「NPO法人学生人材バンク」と出会い、鳥取へ来ました。仕事を通じて農村に赴く機会も多く、自分も地域に入って活動したいと思うようになり、狩猟と農家民泊を組み合わせた「ハンター民宿BA-BAR」を立ち上げました。現在、集

落の猟師2人と共に「三矢弓援隊(みつやきゅうえんたい)」を結成し、狩猟体験やジビエ(野生鳥獣肉)料理体験などの交流事業を行っています。料理のアレンジ面などでは集落の女性陣の手も借り、地域ぐるみで活動しています。

学生時代は、動物に関する活動のほか、アルバイト等を通じて知り合った人々たちを誘って飲みに行ったりスポーツをしたり、よく遊びました。人と交流することの楽しさを知ったことが今の活動につながっています。学生の皆さんは素直な姿勢と笑顔を大事にして、能動的な学生時代を送ってください。







水産学部附属練習船かごしま丸

三等航海士・事務長 畑辺 佳奈子(はたべ かなこ)

奈良県出身。2007年3月鹿児島大学水産学部水産学科卒業。東京海洋大学専攻科、海技大学校にて外航船の船員養成課程を履修。民間海運会社勤務を経て2013年6月かごしま丸航海士に就任。

OB OG Interview

02



勉強や資格はできる限り身につけていたほうがいい。だけど、机上の学問以上に大切なのが人間関係力だと思います。

出

身は奈良県で海のな  
い土地柄なのですが、

家族で毎夏訪れていた伊良湖岬での磯遊びが面白くて海の生物に興味を抱き、水産の道へ進みました。

入学後の乗船実習を機に航海士を目指し、卒業後も東京海洋大学、海技大学校で学び、民間の海運会社に就職しました。ですが、その会社では航海士として勤務する機会に恵まれませんでした。航海士への夢をあきらめきれず、かごしま丸の航海士採用試験を受験し、運良く転職できました。航海中は24時間、三交代で甲板部員と共にワッチ(航海当直業務)に従事しています。目視やレーダーで船や障害物を確認するほか舵を切ることもあり、やはり緊張感はつきものです。航海は短いもので日帰りから1週間。遠洋航海実習になると1か月半に及ぶ時もあります。男性クルーの中に女性一人というのは少々大変な部分もありますが、それ以上に周りの方が気遣ってくださっている

のではないかと思います。

学生の皆さんに伝えたいことは、学生時代に勉強してほしいということ。海技免許は6〜1級まであるのですが、私は、3級以上を社会人になってから取得したので、仕事と勉強の両立がかなりきつかったです。何であれ、持っている資格は学生時代に取っておいた方がいいです。それからもう一つ、学生時代の人間関係は大事にしてほしいと思います。転職にあたって、学生時代の友人や恩師がいろんな形で力になってくれた時、人の信頼関係のありがたさを実感しました。人間関係においては、ズボラであってはいけないと思います。



## 研究室から



SCHOLAR INTERVIEW

## うがい液を用いた口腔がん検診法の確立

～早期発見と発症リスク予見を可能にした鹿大発の画期的手法～

口腔がんは舌がん、口唇がんなど口の中にできるがんの総称。初期は無症状のため、気づいた時には手遅れというケースの多い厄介ながんだ。この口腔がんの早期発見に向けて取り組んでいるのが、杉浦剛教授を中心とする、鹿大病院口腔顎顔面センター口腔外科チームだ。2012年には、世界に先駆けて、うがい液を使った画期的な口腔がん検診法を構築。チームの中心となって研究を進める濱田先生に、実用化へ向け始動している鹿大発の独創的な検診法について伺った。

### 命を救い、QOLを守る

鹿大病院の口腔外科の医師として日々ヒトの口の中と対峙する濱田先生は、口腔がんは早期発見が難しい病気の一つで、近年増加傾向にあると言ふ。「口腔がんは口内炎などとの見分けが難しく、プロ中のプロである歯科医や口腔外科医でも診断は非常に難しいです。口内炎かな、というくらい症状であつても、2〜3か月のうちに大きくなってしまふケースも少なくありません」。初期の段階は自覚症状もほとんどないため、気づいたときにはがんが進行してしまつているケースが多いのだという。

口腔がんの手術では、舌や顎骨、顔面を切除するため、咀嚼障害や嚥下障害、顔貌の変形などの後遺症が残ることもある。また切除範囲が大きい場合は、他部位の皮膚や人工物を用いて欠損部の再建を行う必要もある。経済的にも身体的にも負担が大きい手術だが、予後がよくない場合もある。「早期に発見できると日帰りの小

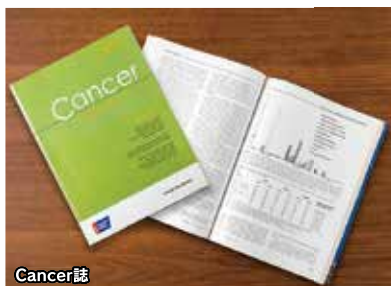
さな手術ですむし、その後の機能低下や後遺症もほとんどありません。命を救うことはもちろん、術後のQOL(生活の質)をキープするためにも、早期発見が大切なのです」

### 手軽で、安くて、痛くない

早期の乳がんを発見するにはマンモグラフィ、また肺がん検診にはレントゲン撮影というスクリーニング検査(発症者や発症が予測される人を選別する医学的手法)がある。だが、口腔がんにはスクリーニングの手法が確立されておらず、検診には医師が出向いて視診、触診せざるをえない状況。コストがかかる上、一人の医師が診ることができる人数には限界がある。「安くて、何回でも実施できて、痛くない、怖くない。そういう検査システムを作りたいと思つたんです」

大学院時代に携わつた臓器がんの研究にヒントを得て、口の中のがん抑制遺伝子の異常(DNAのメチル化)を調べるという手法を思いついた。「うがい





Cancer誌



## Scholar Interview

# 濱田 倫史 助教

医歯学域附属病院  
鹿児島大学病院  
口腔顎顔面センター 口腔外科



### Profile 濱田 倫史 (はまだ・ともふみ)

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科2004年3月修了

■所属学会: International Association of Oral and Maxillofacial Surgeons, 日本口腔外科学会、日本口腔科学会、日本癌学会、日本口腔内科学会

■専門分野: 口腔外科学、口腔腫瘍学

■研究テーマ: ○うがい液からの発癌予測システムの開発 ○非侵襲的な口腔がんスクリーニング法の開発 ○口腔癌の予後規定因子に関する研究

をすると、口の中の何千何万という細胞が取れます。口の中の粘膜を丸ごと剥がすようなものなので、どこに病変があるか分からない場合でも早期発見が可能です。唾液をとる検査もあります。うがい液を調べる方が効果的です。がん患者と健康者のうがい液を採取して比較、検証を重ねた結果、うがい液による検査法が、がんの早期発見において高い効果を上げるという証左をつかんだ。

### 口腔がん死亡者をゼロに

鹿大チームの論文は2012年、アメリカ癌学会発行の学術論文誌「CANCER」に掲載され、世界的な注目を集めた。「がん組織を切り取って細胞のメチル化を調べる研究は進んでいましたが、うがい液によつてがんを早期発見できることを証明した科学者はまだいなかったのです。うがい液を使った検査では、がんの有無だけではなく、がん抑制遺伝子の異常の蓄積度も把握することができ。昨年9月には、がんの前の

段階である「前がん病変」を高精度で検出できる方法の特許出願した。現在、実用化に向け、複数の企業と開発が進められている。「早ければ数年以内に、鹿児島大学式の検査キットや検査装置が全国の歯科医院に設置される。あるいは、どこかの検査センターに検体を集めて検査する、というようなことが実現しているかもしれません」

研究の途上、地方の歯科医師との連携によって患者の口腔がんを早期発見したことがあった。通常は見落とすようながんを、送られてきたうがい液だけで発見できたのである。「医療へき地と呼ばれる地域に住んでも、システムさえ確立すれば遠隔診断ができる地域医療の可能性が見えました」。濱田先生の目標は、鹿児島県内のすべての人が検診を受け、口腔がん死亡者がゼロとなること。「しゃべる、食べる、息をする、唾を飲む、という当たり前の行為ができる幸せを大切にしたいんです」。健康のありがたさを知る専門家の、心からの願いである。



## 研究室から



SCHOLAR  
INTERVIEW

## 火山から生まれたシラスコンクリートの可能性

～「厄介者」を資源として生かす。科学者の探究心と発想の転換～

霧島市牧園町「丸尾の滝」近くの国道223号に、2015年春「丸尾滝橋」が開通。曲がりくねった小径が、快適なドライビングスポットに生まれ変わった。橋脚部分の土台には、鹿児島ではおなじみのシラス(火砕流堆積物)を活用したコンクリートが使われていることをご存じだろうか?厄介者扱いされてきた火山灰を優れた素材に変えたのは、研究者の探究心と歴史にヒントを得た発想の転換だった。「縁の下の力持ち」として先端技術を支える武若先生の研究を紹介する。

### 通念を覆す

コンクリートは、基本的にセメントと骨材(碎石、砂など)と水で構成される。丸尾滝橋の4本の橋脚の基礎部分を固めるコンクリートの骨材として使われたのが鹿児島県土に広がる火山噴出物のシラスだ。シラスに含まれる物質とセメント中の成分が化学反応を起こすため、高い強度を持続。硫黄分や塩分、高温にも強く、海中や温泉地など過酷な自然環境の中でも高い耐久性を持つことから温泉地での橋梁建設に採用された。武若先生が長年研究を重ねて開発したシラスコンクリートで造られた国内初の橋梁だ。

シラスを使ったコンクリートの開発は、武若先生が取り組む以前から行われていたという。実際、1960年代から70年代にかけて、桜島に設置されたコンクリート製の待避壕にシラスが使われたこともあったそうだが、当時のシラスコンクリートは一般のコンクリートに比べて強度と品質が劣ってお

り、普及には至らなかった。「もともとシラス中には沢山の空隙があつて強度が不足する上、ガラス質のため素材としては不適なのです。また、コンクリートに使用する砂の粒径についてはJIS規格等による定めがあり、当時は、基準に満たない微粒子分を取り除いた部分のみを使っていました。結果的にシラスの良さが生かされていなかったのです」

### ギリシャ・ローマ時代にヒントを求めて

本学に着任した30余年前、武若先生自身もシラスの有用性には否定的だったという。「ある建設業者さんから、シラスをコンクリート用骨材として使用できないかと相談があつた時、無理だと即答したので。机上の知識では、これが正答だったので」。だが、そのことが契機となり、土木材料としてのシラスを見つめ直すようになった。

しかし、調べれば調べるほど、シラスがコンクリートの骨材に不向きであることが際立って





丸尾橋



シラスコンクリート用のシラス



通常のコンクリート用の海砂



写真右:古代ローマ建築のコンクリート施工部分  
写真上:古代コンクリートの拡大写真



## Scholar Interview

# 武若 耕司 教授

理工学域工学系  
理工学研究科(工学系) 海洋土木工学専攻  
学内共同教育研究学域学内共同教育研究学系  
地域防災教育研究センター



**Profile** 武若 耕司(たけわか こうじ)  
鹿児島大学工学部海洋土木開発工学科(当時)1977年3月修了。  
東京大学大学院工学研究科土木工学専攻1982年3月修了。  
■所属学会:土木学会(コンクリート委員会常任委員)、日本コンクリート工学会、日本材料学会  
■専門分野:防食工学、維持管理工学、土木材料学、コンクリート工学  
■研究テーマ:○海洋コンクリート構造物の寿命予測と維持管理計画 ○土木材料としてのシラスの有効利用 ○コンクリート中の鋼材の腐食・防食に関する研究 ○酸性環境下のコンクリート構造物の性能評価 ○コンクリート構造物の劣化診断技術の開発とその応用

いった。武若先生が研究の手掛かりにしたのは、古代ローマの街づくりに使われていた「ポッツォーリの塵」と呼ばれる火山灰。コロッセオやパンテオン、水道橋など、今も形をとどめる構造物を形づくるため2000年前に使われたコンクリートの材料だ。試行錯誤の結果、捨てていたシラスの微粒分に「ポッツォーリの塵」と同じ特徴があることを解明。シラスコンクリートの可能性が見えた。「基準に満たないからといって小さい粒子を捨てるのではなく、シラスを全部使ってみよう。シラスを代替品として使うのではなく、シラスじゃないと作れない製品を作り出そう、というふうに発想を転換したのです」

### 責任をもって後世につなぐ

かつて栄華を誇ったローマ帝国が滅亡したのは、大量の土木工事や建造物の維持補修が帝国の財政を圧迫したことも一因だと言われている。「ものを作ったら、作りっぱなしではいけない。作ったものはちゃんと

お守りして、それを代々引き継いでいく方法を今のうちに確立しておくことが大事です。そうしないと、ローマ帝国ではありませんが、いつかは自分たちの作ったもので自分たちの首を絞めてしまいかねません」と武若先生は言う。

かつて骨材として使用していた川砂は資源が枯渇し、採取が困難になった。また、海洋環境保全の観点から海砂の採取も厳しくなることが見えており、現在、新しい資源が求められている。「シラスは骨材としての役割もするし、セメントの役割もする。しかも無尽蔵です」。武若先生はシラスの持つ可能性に期待をかける。現在、コスト高が一つの課題だが、需要が拡大して量産体勢が整えば価格も下がる。「シラスに限らず、未利用資源を有効活用するには、技術の進歩だけでなく、物の見方を少し変えること、つまり発想の転換が必要なのです」。ローマ時代のコンクリート片を前に、私たちには人類の叡智を後世へつなぐ責任があると武若先生は熱く語った。





## 大野地区公民館長から感謝状が贈呈されました

7月14日、前田芳實学長を表敬訪問された垂水市大野地区の前田清輝公民館長と内田のり子加工グループ会長から、鹿児島大学へ感謝状が贈呈されました。

これは、大野地区公民館\*が鹿児島県共生・協働の農村づくり運動表彰(農村集落部門)受賞にあたって、長年にわたる本学学生有志団体・森人(もりんちゅ)くらぶの大野地区における①2006年設立の大野ESD自然学校の活動支援と、垂水市の学校教育、社会教育への貢献、②大野地区住民と一丸となつての公民館活動や振興会の奉仕作業、伝統芸能(棒踊り)の継承、その他の積極的な取り組みに対して、大学への感謝を表されたものです。

前田公民館長から感謝状を手渡された前田学長は「地域振興の大きな原動力を本学学生が支えて感謝されることは大変光栄なことです。大野地区での活動は大学としてもアピールさせていただきます」とお礼を述べました。その後に行われた懇談では、森人くらぶの代表3人、岩井久農学部長、井倉洋二農学部附属演習林主任が同席し、附属演習林内に位置する大野地区とのこれまでの関わり、学生が来ると地域住民が生き生きすることや地域創生の先駆け事例に該当するのではないかなど、多くの話題に話がはずみました。

※平成28年度(第55回)農林水産祭内閣総理大臣賞(むらづくり部門)を受賞されました。



前列左から前田公民館長、前田学長、内田会長

## 九州の国立大学で初めて 看護師特定行為研修機関に指定されました

8月4日、鹿児島大学病院は、厚生労働省から「看護師特定行為研修機関」に指定されました。九州の国立大学で初めてのことになります。これにより、鹿児島大学病院看護師特定行為研修センターで研修を修了した看護師は、医師又は歯科医師の判断を待たずに手順書により特定行為を実施することができるようになります。

県下唯一の大学病院として、高度実践的看護臨床教育を通して地域医療の質向上に貢献し、特に医療資源の少ない離島・へき地でも安全で安心な医療を提供できる人材を育成することを目指します。



左から向窪看護部長、熊本病院長、垣花センター長、福元特定看護師

## 山東師範大学外国語学院書記が学長表敬

7月22日、山東師範大学(中国)の呂志紅(ろしこう)外国語学院書記、李光貞(りこうてい)外国語学院日本語系主任のお二人が前田芳實学長を表敬訪問されました。

2009年に人文社会科学研究科と山東師範大学外国語学院が部局間交流協定(2014年に大学間交流協定に更新)を締結以降、学生交流を継続していますが、今回、本学グローバルセンター教員との意見交換や山東師範大学からの留学生との懇談などを目的に教職員の初めての来学となります。

懇談では、これまでの交流実績や今後の予定について同席の法文学部教員から説明があり、前田学長からは、交流の更なる充実への期待が述べられました。

懇談後はグローバルセンター教員とダブル・ディグリープログラム\*実施に向けた具体的な課題について活発な意見交換が行われ、両校のより一層の学術交流及び友好関係の発展に繋がる内容となりました。

※我が国と外国の大学が、教育課程の実施や単位互換等について協議し、双方の大学がそれぞれ学位を授与するプログラム



右奥:呂志紅書記、右手前:李光貞主任





## 産学官連携黒膳プロジェクト「『鹿児島県の黒』美味食のススメ」を開催

9月6日、「クロの日」に、城山観光ホテルで「『鹿児島県の黒』美味食のススメ～薩摩黒膳のタベ～」が開催されました。これは城山観光ホテルと鹿児島大学が共同で主催したイベントで、「黒」を特徴とする鹿児島の食材の魅力を紹介したものです。

前田芳實学長の開会挨拶に続き、本学卒業生の榎山美喜子KKB鹿児島放送編成業務部長の司会で第1部のパネルディスカッションが行われました。鹿児島の食材の機能性を研究する研究プロジェクト「黒膳研究会」から、侯徳興農学部教授が「黒食材の機能性と黒膳の定義」、乾明夫医歯学総合研究科教授が「医学的応用の研究と可能性」、改元香鹿児島女子短期大学講師が「機能性を損なわない調理法」を発表しました。また、村山葉月はつき皮膚科クリニック院長が、アンチエイジングに食材が果たす役割を説明しました。

第2部の特別招宴では、東清三郎城山観光株式会社代表取締役社長の挨拶に続き、三反園訓鹿児島県知事が来賓として「鹿児島のPRを目的として行われる産学官連携プロジェクトを頼もしく思います」と挨拶されました。また、本学の伊牟田均監事から協賛企業への謝辞が述べられました。

招宴には城山観光ホテルがこの日のために創作した、鹿児島の黒食材をふんだんに使った和食特別会席が饗され、約400人の参加者は次々に登場する料理と飲物を楽しみました。鹿児島の食材の魅力を研究者の発表と美味しい料理で紹介する取り組みは盛会裏に終了し、本学の産学官連携活動にも新たな契機となりました。



前田学長の開会挨拶

## 鹿児島大学教育学部ICT活用促進フォーラムを開催

9月3日、教育の情報化推進に寄与する人材育成をテーマに、鹿児島大学教育学部ICT活用促進フォーラムを開催しました。鹿児島県及び九州各県の教育関係者を対象として、関東・関西・中四国からの参加も含め、県内外から200人近い参加者が会場となった教育学部に訪れました。

開会行事では、土田理教育学部長から開会挨拶に続き、本フォーラムの開催趣旨の説明があり、基調講演や模擬授業等の講師の紹介がありました。

基調講演「アクティブ・ラーニングとICT活用の今後」では、講師の新津勝二文部科学省情報教育課情報教育振興室長から、教育の情報化に関する国や都道府県の施策や現状、アクティブ・ラーニングの具体的展開について詳細な解説が述べられ、参加者から大変に参考になったとの声をいただきました。

パネルディスカッションでは、「教育の情報化におけるこれからの取組とは」をテーマに、林耕司鹿児島県教育庁義務教育課指導主事、木田博鹿児島市立学習情報センター主幹、野本正樹霧島市メディアセンター副所長の3人のパネリストが、教育学部の山本朋弘講師の進行のもと、林指導主事からは、鹿児島県教育委員会が取り組む文部科学省委託事業「テレビ会議等を用いた遠隔教育」についての紹介、木田主幹からは、鹿児島市教育委員会が取り組むタブレット端末活用の研究推進や校務支援システムの導入による教職員の負担感軽減についての解説、野本副所長からは、霧島市教育委員会が取り組む文部科学省委託事業「小学校英語教育でのICT活用」の成果についての報告がありました。

さらに、ICTを活用した模擬授業では、電子黒板やタブレット端末等を活用した模擬授業を実施し、講師の鹿児島市立山下小学校の清藤大嗣教諭、中原雅弘教諭が先生役をつとめ、参加者が子ども役となって、タブレット端末を活用した授業を体験しました。実際に電子黒板やタブレット等のICTに触れながら、授業での活用方法をグループ協議の中で深めることができました。

鹿児島県の教育の情報化の推進において有意義なフォーラムとなりました。



パネルディスカッションの様子



## 水産学部附属練習船「かごしま丸」の出航式を開催

8月17日、鹿児島大学水産学部附属練習船「かごしま丸」の出航式が谷山港で行われました。今回の長期遠洋航海は、水産学部の学生18人(3年生17人、2年生1人、うち女子6人)と乗組員の計43人が乗船し、中西部太平洋における漁業実習(マグロ延縄)や航海実習、海洋観測実習のほか、寄港地(マラカル港・パラオ共和国)における学術交流、水産事情の調査などを行います。

式は停泊中のかごしま丸の前に、前田芳實学長の壮行挨拶に続き、越塩俊介水産学部長の挨拶、内山正樹船長の挨拶、実習生挨拶、花束贈呈、校歌斉唱と行われました。実習生挨拶では、水産学部水産学科3年下大迫晋さんが代表して「それぞれに与えられた役割、課題をこなしていくなかでの知識や経験は、普段の生活では得られない貴重な体験であり、とても楽しみにしています。本日、無事に出航を迎えられたことに感謝し、この経験を将来に活かせるよう充実した毎日を過ごしていきたい」と抱負を述べました。

家族や多くの友人らが見送る中、中西部太平洋に向けて出航した「かごしま丸」はマラカル港に寄港し、9月26日に帰港しました。



## 第4回稲盛アカデミーシンポジウムを開催

9月30日、稲盛会館において、第4回稲盛アカデミーシンポジウム「稲盛フィロソフィは、なぜ社会を動かせるのか」が開催され、250人が参加しました。

第一部の基調講演では、稲盛和夫氏(京セラ株式会社名誉会長・KDDI株式会社最高顧問・日本航空株式会社名誉顧問)より「今、君たちに伝えたいこと」と題して、これからの将来を見据え、日本のみならず、広く世界の人類社会のために役立つ人間となるために、「思い」の強さについて、京セラ創業、KDDIの立ち上げ、JALの再生等に携わった体験と半生を振り返りながら講演を頂きました。純粋で美しい「思い」を持つことに加えて強烈な願望をもつことが重要であることに触れ、その願望は「世のため人のために役立つことをなすことが人間として最高の行為である」と説かれました。「思い」の実現は短期的に捉えるのではなく、人生という長い時間軸で捉え、こつこつと積み上げていくことで人間性を高めていくことが出来るという言葉で締めくくられました。講演終了後は学生5人から質問を受けて頂き、参加者の理解を更に深めることができました。また参加者から、「目には見えないが『思うこと』がもっているとても大きな力の意味がよく理解できました」などの感想が多数寄せられました。

第二部では稲盛アカデミー客員教授で稲盛フィロソフィ研究の最高峰の先生方によるパネルディスカッションが行われました。日置弘一郎氏(公立鳥取環境大学経営学部教授・京都大学名誉教授)をコーディネーターに迎え、パネリストとして、高巖氏(麗澤大学大学院経済研究科および経済学部教授)と青山敦氏(立命館大学MOT大学院教授・稲盛経営哲学研究センター長)、三矢裕氏(神戸大学大学院経営学研究科教授)の3名に参加して頂き、「稲盛フィロソフィ:何を研究し、どう教育するか」について熱く意見が交わされ、参加者が稲盛フィロソフィをより深く理解する手がかりを掴むことにつながりました。



学生の質問に答える稲盛氏

## 鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。

つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象となります。

お問い合わせ先

鹿児島大学学長戦略室 TEL:099-285-3102 FAX:099-285-7034

E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp

基金ホームページ: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/>







# 進め！ 鹿大生！ STUDENT INTERVIEW

NPO法人フードバンクかごしま  
前学生リーダー

たごころ たかひで  
**田所 貴秀 さん**

(水産学部水産学科3年生)



## 何かしたいという気持ちを実行に表すことができる場がフードバンクです ～社会貢献活動を通じて社会とつながり、自己を実現する～

まだ食べられるのにも関わらずさまざまな理由から処分されてしまう食品を、必要とする人や団体に届ける活動を行っているのが「フードバンクかごしま」です。田所貴秀さんは、今春まで学生メンバーのリーダーを務めていました。

「人のために何かしたいという気持ちを実際に行動に表すことができる場がフードバンクです」と田所さん。以前からボランティアに興味があり、フードバンクに出会う前は福島でのボランティア活動に参画したこともありました。

「思春期辺りから大人に対して抵抗を感じていて、大人は怖い、面白くない、という思い込みを持っていました。ですが、フードバンクなどの活動を通じていろんな人と出会い、社会人になっても自己実現はできるし、面白い大人もたくさんいることに気づきました」と話す。

これまでの経験を糧に、新たに、学生と社会をつなぐ活動に着手。年明けには、海外でのインターンシップを支援するNPO法人「GROAD」を設立予定です。一つひとつの出会いを糧に、大きな歩幅で前進しています。

### 座右の銘

#### 「個として強く」

困難に立ち向かう力や、課題が出てきた時に対応する力を身につけたいと思います。チームワークは大切ですが、自分が強ければどこへ行っても臨機応変に対応できると思うので、まずは自分を強くしたいです。そうすればいろんな経験もできて、人間として魅力が増すのではないかと思います。



# さっつんが行く!

鹿大キャンパス漫遊記

SATTUN's Campus Sketches



鹿児島大学公式マスコットキャラクター

さっつん



Vol.05

## 鹿児島大学 保健管理センター

保健管理センターは、病気や健康に関する相談に対応するほか、体調不良やけがなどの場合は必要な応急処置を行う学校保健室の機能を備えています。急な体調不良により講義室などで動けなくなった場合、医師と保健師が現場に駆けつけ、必要に応じた応急処置やご家族への連絡などを行っています。

2015年1月には機能充実を図り、感染症治療室、学生支援室などを増築。インターネットを利用した感染症登録システムによる状況把握や感染拡大防止等に取り組んでいます。

喫煙の有害性、急性アルコール中毒の危険性、ドラッグ不正使用の怖さなど各種啓発活動への取り組みのほか、いじりやいじめ等各種ハラスメントに関する情報提供も行っています。



## 📷 今号の表紙「稲盛会館」

工学部創立50周年記念事業の一環として1994(平成6)年、本学卒業生の稲盛和夫氏(京セラ株式会社名誉会長)の寄付によって建てられました。

設計は、稲盛氏と交流のある世界的建築家・安藤忠雄氏が担当。卵形の建物は、新しい創造の生命が宿る小宇宙をイメージしています。ここから鹿児島発、世界へと時代を担う若者が飛び立ってほしいという願いが込められています。

建設から20余年経た今も建物のセンスは古びることなく、来館者の感性を刺激し、国際会議や学会、シンポジウムなど、科学技術を中心とした学内外の情報交換や知的交流の場として活用されています。

